# 塚本學先生をお送りする

福田豊彦

本館歴史研究部長の塚本學先生は、本年三月をもって停年退官の日をお迎えになる。信州大学の人文学部におられた先生が、本館民俗研究部教授を併任されたのは一九八一年八月であるという。本館は、昨年十一月に創設十周年の記念祝典を行い、来年三月には開館十周年を迎えるので、先生はまさに草創期の歴博とともに歩んでこられたことになる。私の先生との接触は短いが、研究委員長としての先生が、歴史学・民俗学・考古学を総合した新しい歴史学の創造をめざし、執拗なまでの筋論を繰り返され、若い歴博のルール作りに努力される姿に感服した一人である。

塚本先生の本格的なご研究に接する機会も乏しく、先生の学問を紹介する資格は私にないが、「日本文化外史」と副題された『都会と田舎』（平凡社選書）を拝見しても、豊かな比喩と詩的な論理の展開、それを支える該博な知識に驚嘆させられる。そしてここにも、文献史学の枠を遥かに越え、「人間とその社会」をも超えた草木虫魚「生きとし生けるもの」すべてを対象に取り込むような、新たな歴史創造への先生の情念をうかがうことができる。

高校教諭～信州大学教授時代を通じての先生のご活躍を紹介することも私にはできないが、当館では、第3展示室の「文書と絵図」の構成をはじめ、「秋岡コレクション」「描かれた江戸」の企画展示を主催された。先生はまた、「どうにもなるまい」と噂されていた『旧高旧領取調帳データベース』に手を入れてともかくも公開にまで持ち込み、その後も付加価値の増加に努めてこられたし、多年こつこつと整理された「石見国福光下村福富家文書」の目録を作成され、当館の文書目録の刊行にも先鞭をつけられた。そしてまた、産経児童出版文化賞を受賞した小中学生向け展示案内誌『日本歴史探検』の刊行も、先生の功労のひとつとして忘れられない。先生の歴博時代は、まさに若者顔負けの多面的なものであった。

歴博も十年、草創期を終えて成熟期を迎えようとしている。先生が拓かれた道は前例として定着し、先生が主張された歴史・考古・民俗を総合した「新しい歴史学」創造の作業は、若い世代に受け継がれ、やがて豊かな稔りを見せるであろう。もちろんその道も平坦ではあるまいが、問題に直面するごとに、先生の深い情念が思い起こされることであろう。今はただ先生に、失敗をも含めた後輩の歩みを、温かく見守っていただくことを願うのみである。

（先生のご健康を祈念しつつ）

（国立歴史民俗博物館歴史研究部）